

津軽十二湖湖沼群における湖沼名の検討

An Examination of Lake Names in the Tsugaru-Jūniko Lake Group, Northern Japan

大高 明史*・対馬 康夫**・齋藤 捷一*

Akifumi Ohtaka*, Yasuo Tsushima** and Shōichi Saito*

Abstract

Since much nominal confusion is found among lakes in the Tsugaru-Jūniko lake group, the suitability of the name is examined for 31 lakes. Through historical and topographical check-ups, we came to the conclusion that the names used in Yoshimura et al.(1934a, b) are the most suitable in all lakes examined. A list of the 31 lake names is given.

1. はじめに

白神山地の北西山麓、日本海から約2 kmの山間部に位置する津軽十二湖（東経139°57.9～59.5′、北緯40°32.4～33.8′；青森県西津軽郡岩崎村）は、大小30数個の湖沼から成る湖沼群である。われわれは、湖沼環境と生物についての関わりを明らかにすることを目的に1986年から本湖沼群の継続調査を行っており、調査結果の一部をすでに発表している（齋藤・他, 1988；水野・斎藤, 1990）。本調査研究において、湖沼群全域の水質および生物群集について過去と現在の調査結果を比較する過程で、現在使用されている各種の地図や案内図、現場の標識の間で、またこれらと過去の資料との間で湖沼名に相当の混乱が生じていることが明らかになった。したがって、過去の情報との比較検討に先立ち、新旧の湖沼名の対応関係を明らかにする必要があるため、ここで湖沼名の整理を試みた。本湖沼群に含まれる湖沼の数については吉村・他（1934a, b）は湖盆形態に着目し33湖沼としているが、玉池および大池のそれぞれの2つの湖盆（どちらも東および西湖盆）をひとつずつとみなすと、31湖沼になる。本論文はこの31湖沼のそれぞれの呼名についての検討結果である。なお、本湖沼群を総称する名前としては、過去に七つ沼（陸地測量部, 1917；越口の池湖沼群に相当：吉村・他, 1934a による）、松神の百沼（大町, 1929）、松神十二湖（吉村・木場, 1933）という名前が使われたこともあるが、ここではすでに定着している“十二湖”に岩木川河口の十三湖と区別するために“津軽”を加えたという津軽十二湖（小川, 1934）の名称を用いた。

2. 資料の収集とその種類

湖沼名の比較検討のために収集した資料は、陸水学あるいは地理学、地質学の論文や報告書、

* 弘前大学教育学部自然科学科教室, 〒036 弘前市文京町1；Department of Natural Science, Faculty of Education, Hirosaki University, Hirosaki 036, Japan.

** 青森市水道部, 〒030 青森市浦町72-19；Department of Water Works, Aomori City, Aomori 030, Japan.

治山事業等のために作られた各種の地図、紀行文、産業・観光等にかかわる地域案内など多岐にわたった。本湖沼群の陸水学的・自然地理学的研究史については齋藤・他(1988)に詳しい。これによると、本湖沼群の研究は1930年代前半から始まり、1930~40年台に数多くの報告がなされているが、1960年以降に湖沼群そのものを扱った原著文献はわずかに4編(弘前高校生物部, 1962; 酒井・宮城, 1963; 齋藤・他, 1988; 水野・齋藤, 1990)に限られ、近年の研究報告がきわめて少ないことがわかる。一方、最近の資料としてはガイドやパンフレットなどの観光を目的としたものが多かったが、それらの多くは地図がイラスト的で不正確なために比較検討の材料として使用できるものはわずかであった。このほか、湖名確定のよりどころになると思われる呼名の変遷や定着の程度などについては、文献の他に地元の方々からの情報を参考にした。また、資料中の記述や聞き取りで得られた内容と実際の湖沼の対応関係を確認するために、1990年11月から1991年11月までの期間に7回の現場調査を行った。なお、各資料間に見られる漢字とひらがな・かたかな等の表記方法の違いや、沼と池の違いとその前に付く‘の’の有無、読みかたや送りがなの違いは検討の際のくい違いとはしていない。

3. 湖沼名の比較検討結果

湖沼名は他の地名と同様に歴史的産物であるので、その妥当性を論じる場合には、命名の時期、由来あるいは形状などの特徴とそれを表すものとしての名称の整合性、定着の度合などを相互に考慮すべきであると思われる。ここでは湖沼名が使用され始めた年代、由来、呼名の混乱の経緯を個別に検討したあとで、個々の湖沼について名称の妥当性を判断した。

3.1 湖沼名とそれが使用された年代について

現在名前の付いている31湖沼の名前を網羅した最も古い文献は吉村・他(1934a, b)であった。これには各湖沼の位置関係がはっきりと判別できる地図が掲載されており、その地図は深浦営林署の松館康太郎氏から入手したことが明記されている。したがって、吉村・他(1934a, b)で使用されている湖沼名は基本的には深浦営林署の資料によったものと思われ、4つの湖沼(八光の池, 小夜沼, 子宝の池, 千鳥池)についてはそれらの名前が当時の深浦営林署の命名によることを明記している。また、現在の越口の池湖沼群に属する王池も以前は大池の字を当てていたが、南方の大池と区別するため1933年から深浦営林署で王の字を用いたことが記されている。さらに、仲道の池についても元来この名前は現在の日暮の池を指す名であったが、日暮の池の改名に伴ってそれまで名前がなかった東方の池の名となったとのことから、これらの湖名もこのころの命名であると推測される。また、同じく吉村・他(1934a)によれば、藁沼は紅葉池とも言われていたという。しかし、今回の資料収集の過程では当時の営林署資料を入手することはできなかった。湖沼群全般を扱った文献としては一年前に同じ著者の2名による論文がある(吉村・木場, 1933)。この論文では3つの湖沼(吉村・他(1934a, b)の藁沼, 八光の池, 三蔵の池)の記載がないが、他の湖沼の名前については吉村・他(1934a, b)と同一である。

数湖沼に限られてはいるが、収集した資料の中で個々の湖沼名が明記されている最も古い文献は大町桂月(1929)が1922年来訪した際の紀行文「松神の百沼」であった。このなかで大町は5つの具体的な湖沼名(大沼, 濁沼, 金山沼, 糸畑沼, 中水沼)をあげている。このうち中水沼という名前はこの文献だけに見られる名前ですべて以後使われていない。しかし、記述から湖

沼の位置関係を把握することは困難であり、これが現在のどの湖沼に対する呼名であったのかははっきりしなかった。なお、18世紀末期にこの地を歩いた菅江真澄の紀行文、「外が浜風」と「外浜奇勝」、および1876年に編纂された「新選陸奥国誌」に本湖沼群に関する記述はない。

一方、人文社(1970~1990)、岩崎村役場企画課(1972)、東奥日報社(1981)、水野(1987)、西口(1988)の近年の5つの資料中には以前の資料に見られないメヨウガ池、めようがの池あるいは茗荷の池という湖沼名が記されている。このうち、水野(1987)と西口(1988)を除く3つは同一の地図を使っており、これらおよび水野(1987)のメヨウガ池(めようがの池)の位置は吉村・他(1934a, b)の石殻の池に対応する。一方、西口(1988)は吉村・他(1934a, b)の萱原の池にこの名を当てており、資料間で違いがみられる。また、この名前は岩崎村役場・岩崎村観光協会(1980)の十二湖観光パンフレットの中の湖沼の一覧表にも見られる。岩崎村役場によれば、この表は岩崎村役場企画課(1972)に基づいており、さらに水野(1987)の湖沼一覧表はこの岩崎村役場・岩崎村観光協会(1980)によっている(水野、私信)。出典を同じくするこれら3つに見られる湖沼一覧表は、数値が一致することから吉村・他(1934b)の第6表が原典であると思われる。しかし、このメヨウガ池(めようがの池)の名は吉村・他(1934a, b)にはなく、その名称の出どころに関しては明らかにできなかった。したがって、湖沼名が使われ始めた時期については、吉村・他(1934a, b)が記した営林署命名による湖沼の他は確定できなかった。

3. 2 湖沼名の由来について

湖沼名の由来に関しては、吉村・他(1934a, b)が17の湖沼について聞き取りによる記述を加えている。特記すべき記述を再録してこれらをあげると、水の特徴(青池、濁池、沸壺の池)、湖の形状(鶏頭場の池、牛蒡池、千鳥池)、位置や周辺の地形(八景の池：ハッケの池つまり急坂の上の平地にある池の意、二ツ目の池、影坂の池：カゲは崖の意味、面子坂の池：面子を伏せたような山の坂(面子坂)を登ったところにある)、湖沼を特徴づける生物や物体の存在(藁沼(紅葉池))、四五郎の池：地元でシゴロ草という植物が繁茂している、石殻の池：大石が横たわっている)、真偽は別として故事に関わるもの(糸畑の池、金山の池、三蔵の池：三蔵は当時近くまで湖畔にいた秋田県人の名、埋釜の池：炭焼きの釜が雨季の浸水のため水底に没した)と、さまざまな由来によっているらしく、検討の参考とした。一方、聞き取りを含めてこの文献以外からの由来に関する信頼のおける情報は得られなかった。

3. 3 湖沼名の混乱の状況およびその経緯の推測

津軽十二湖湖沼群は、せまい範囲に多くの湖沼が分布するため、湖沼名を資料間で対応させるためには各湖沼の位置関係が判別できる地図、あるいは記述が必要であった。湖沼群全体を網羅した文献のなかで、このような条件を満たすものについて湖沼名の対応を表1に示した。前述のように31湖沼の名前を網羅した最も古い文献は吉村・他(1934a, b)であるが、これ以降に同じく全湖沼を地図入りで明記した文献としてはKawamura(1956)と盛谷(1968)がある。これらの中で使われている名前は読み方や送り仮名、池と沼の違いがいくつかあるものの、基本的には吉村・他(1934a, b)とすべて一致している。また、弘前高校生物部(1962)と酒井・宮城(1963)で使用している呼名も藁沼が抜けている他は吉村・他(1934a, b)と矛盾がない。したがって吉村・他(1934a, b)で使われた名前は以後30年以上にわたり安定して使用

表1. 津軽十二湖湖沼群の湖沼名
Table 1. A name list of lakes

図1の湖沼番号 (本論文)	吉村・木場 (1933)	吉村・他 (1934a, b)	Kawamura (1956)	弘前高校生物部 (1962)	酒井・宮城 (1963)	盛 谷 (1968)
1	青池	青池	Aoike	青池	青池	青池
2	鶏頭羽(場)池	鶏頭場(ノ)池	Ketobanoike	鶏頭場の池	鶏頭場池	鶏頭場の池
3	なし	藁沼(紅葉池)	Hikiike	なし	なし	藁沼
4	湧壺ノ池	沸壺ノ池	Wakitsubonoike	沸壺の池	湧つぼ池	沸壺の池
5	落口ノ池	落口ノ池	Ochikuchinoike	落口の池	落口池	落口の池
6	中ノ池	中ノ池	Nakanoike	中の池	中池	中の池
7	越口ノ池	越口ノ池	Koikuchinoike	越口の池	越口池	越口の池
8 a	王池東湖盆	王池東湖盆	Main lake basin of Oike	王池	王池東池	王池東湖盆
8 b	王池西湖盆	王池西湖盆	Sub lake basin of Oike	王池	王池西池	王池西湖盆
9	二ツ目ノ池	二ツ目ノ池	Futatsumenoike	二ツ目の池	二ツ目池	二つ目の池
10	八景ノ池	八景ノ池	Hakkeinoike	八景の池	八景池	八景の池
11	仲道ノ池	仲道ノ池	Nakamichinoike	仲道の池	中道池	仲道の池
12	なし	八光ノ池	Hakkōnoike	八光の池	八光池	八光の池
13	日暮池	日暮ノ池	Higurashinoike	日暮の池	日暮池	日暮の池
14	小夜池	小夜沼	Sayonuma	小夜沼	小夜池	小夜沼
15	影ノ坂ノ池	影(ノ)坂ノ池	Kagesakanoike	カゲノサカ池	影坂池	影坂の池
16	長池	長池	Nagaike	長池	長池	長池
17	四五郎ノ池	四五郎ノ池	Shigorōnoike	四五郎の池	四五郎池	四五郎の池
18	子寶ノ池	子寶ノ池	Kodakaranoike	子宝の池	子宝池	子宝の池
19	埋釜ノ池	埋釜ノ池	Ikarigamanoike	埋釜の池	埋釜池	埋釜の池
20	道芝ノ池	道芝ノ池	Michishibanoike	道芝の池	道芝池	道芝の池
21	石殻ノ池	石殻ノ池	Ishikokunoike	石殻の池	石殻池	石殻の池
22	萱原ノ池	萱(菅)原ノ池	Kayaharanoike	萱原の池	萱原池	萱原の池
23	金山ノ池	金山ノ池	Kanayamanoike	金山の池	金山池	金山の池
24	糸畑ノ池	糸畑ノ池	Itobatakenoike	糸畑の池	糸畑池	糸畑の池
25	なし	三蔵ノ池	Sanzōnoike	三蔵の池	三蔵池	三蔵の池
26	牛蒡池	牛蒡池	Gobōnoike	牛蒡の池	午傍池	牛蒡の池
27	千鳥池	千鳥池	Chidorinoike	千鳥池	千鳥池	千鳥池
28	面子坂ノ池	面子坂ノ池	Menkozakanoike	面子坂の池	面子坂池	面子坂の池
29	濁(リ)池	濁池	Nigoriike	濁池	濁池	濁池
30a	大池	大池東湖盆	Sub-lake basin of Daiike	大池	大池東池	大池東湖盆
30b	大池	大池西湖盆	Main lake basin of Daiike	大池	大池西池	大池西湖盆
31	破レ池	破池	Yabureike	破池	破池	破池

1) 岩崎村役場・岩崎村観光協会 (1980), 東奥日報社 (1981) も同じ

対応表
in the Tsugaru-Jūniko lake group

人文社 (1970-1990)	岩崎村役場企 画課(1972) ¹⁾	金属鉱業事業団 (1976)	水野 (1987)	深浦営林署 (1987)	西口 (1988)	標識 (1989)
青池	青池	青池	青池	青池	青池	青池
鶏頭場ノ池	鶏頭場ノ池	鶏頭場の池	鶏頭場の池	鶏頭場の池	鶏頭場の池	鶏頭場の池
藁沼	がま沼	なし	がまの池	なし	がまの池	がま池
沸壺ノ池	沸壺ノ池	滝壺の池	沸壺の池	沸壺の池	沸壺の池	沸壺の池
落口ノ池	落口ノ池	落口の池	落口の池	落口の池	落口の池	落口の池
中ノ池	中池	中の池	中の池	中の池	中の池	中の池
越口ノ池	越口ノ池	越口の池	越口の池	越口の池	越口の池	越口の池
王池東湖	王池東湖	玉池	王池東湖盆	王池	王池東湖盆	王池東湖
王池西湖	王池西湖	玉池	王池西湖盆	王池	王池西湖盆	王池西湖
二ツ目ノ池	二ツ目ノ池	二ツ目池	二ツ目の池	二ツ目池	二ツ目の池	二ツ目の池
八景ノ池	八景ノ池	八景の池	八景の池	八景の池	八景の池	八景の池
仲道ノ池	仲道ノ池	仲道池	仲道の池	仲道池	八光の池	道芝の池
八光ノ池	八光ノ池	なし	八光の池	なし	仲道の池	仲道の池
日暮池	日暮池	日暮の池	日暮の池	日暮の池	日暮の池	日暮の池
小夜ノ池	小夜ノ池	なし	小夜の池	なし	小夜の池	なし
影坂ノ池	影坂ノ池	小夜の池	影坂の池	小夜の池	影坂の池	小夜の池
長池	長池	長池・四五郎の池	長池	長池	長池・四五郎の池	長池
四五郎ノ池	四五郎の池	なし	四五郎の池	四五郎の池	埋釜の池	四五郎の池
子宝ノ池	子宝ノ池	なし	子宝の池	なし	なし	なし
埋釜ノ池	埋釜ノ池	菅原の池	埋釜の池	菅原の池	菅原の池	菅原の池
道芝ノ池	道芝ノ池	道芝の池	道芝の池	道芝の池	道芝の池	なし
メヨウガ池	メヨウガ池	なし	めようがの池	なし	なし	子宝の池
菅原ノ池	菅原ノ池	なし	菅原の池	なし	茗荷の池	なし
金山ノ池	金山ノ池	金山の池	金山の池	金の山池	金山の池	金山の池
糸畑ノ池	糸畑ノ池	糸畑の池	糸畑の池	糸畑の池	糸畑の池	糸畑の池
三蔵ノ池	三蔵の池	なし	三蔵の池	なし	三蔵の池	三蔵の池
牛蒡ノ池	牛蒡ノ池	牛蒡の池	牛蒡の池	牛蒡の池	牛蒡の池	千鳥の池
千鳥ノ池	千鳥ノ池	千鳥の池	千鳥の池	千鳥の池	千鳥の池	牛蒡の池
面子坂ノ池	面子坂ノ池	面子坂の池	面子坂の池	面子坂の池	面子坂の池	面子坂の池
なし	なし	濁池	濁池	湯池	濁池	大池東湖
大池東湖	大池東	大池	大池東湖盆	大池	大池東湖盆	大池西湖
大池西湖	大池西	大池	大池西湖盆	大池	大池西湖盆	大池西湖
破池	破池	破池	破池	破池	破池	なし

されてきたものと言える。しかし、これらの文献は、自然地理学、地質学、陸水学といった互いに近い分野の研究であることから、単に使用した湖沼名のよりどころを同じ過去の文献（たとえば吉村・他（1934a, b））に依ったためであるかも知れない。この点については各文献での使用湖沼名の出典が確定できないため、不明であった。一方、吉村・他（1934a, b）と異なった湖沼名が用いられるのは、本湖沼群の調査研究がほとんどない時期に出版された人文社（1970～1990）が最初であり、かつ、これ以降の湖沼群全体を扱った文献中の湖沼名は、吉村・他（1934a, b）と比べるとなんらかのくい違いが見られた。吉村・他（1934a, b）を基準にしたとき、その後の文献中で使われている呼名のうち、表記の違いや誤植と思われるものを除いてこれと異なるものの数をあげると、人文社（1970～1990）で1個、岩崎村役場企画課（1972）、金属鉱業事業団（1976）、水野（1987）および深浦営林署（1987）で2個、西口（1988）で5個となる（表1）。さらに、1991年現在湖畔に立てられている27の現場標識は1989年に岩崎村役場によって設置されたものであるが（これを標識（1989）とする）、これらのうちでは9つが吉村・他（1934a, b）と異なっていた（表1）。したがって、新しい資料ほど違いが多くなっていることがわかる。また、入手が容易で文献中最も広く使用されていると思われる1:25,000地形図 十二湖（国土地理院, 1987）では、31湖沼のうち面積の広い15個の湖に名称の記載が見られるが、このうち面子坂の池に相当する湖に破池の名を与えている。さらに、現在、現場のところどころに設置されている地図入りの案内板の間に、あるいはそれらと他の資料の間にも多くの呼名のくい違いが見られる。こうした資料間での呼名の混乱のいくつかには関連性が見られることから、引用した文献をたどることでその出どころのいくつかは明らかになると思われたが、地図や湖沼名の出典を明示した資料はほとんどなかった。そこで、ここでは混乱が生じている湖沼を抽出し、そのパターンを整理することによって妥当な名前を検討することにする。

以下の12の湖沼については表記の違いを除くと呼名の混乱がない：越口の池湖沼群に属する湖沼（青池、鶏頭場の池、沸壺の池、落口の池、中の池、越口の池、王池、二ツ目の池、八景の池）、日暮の池、破池、三蔵の池。これらは面積の大きな湖沼および青池のようによく知られた湖沼、または破池のように他の湖沼と離れた位置にあること等の理由で位置の確認が容易なものである。これらは、呼名がすでに安定したものとなっており、検討を要しないと判断した。なお、いくつかの古い現場標識の中に、糸畑の池に対して絹糸の池の名を与えているものが見られるが、現在ではこの名前は全く使われていないようである。

一方、他の19の湖沼は、頻度はさまざまであるが、2つ以上の異なった名前と呼ばれた経過がある。これらを類型化して個別に検討する。以下の比較では、後述するように現時点での候補名として最も妥当であると判断した吉村・他（1934a, b）の中で使われている名前を基準にした。

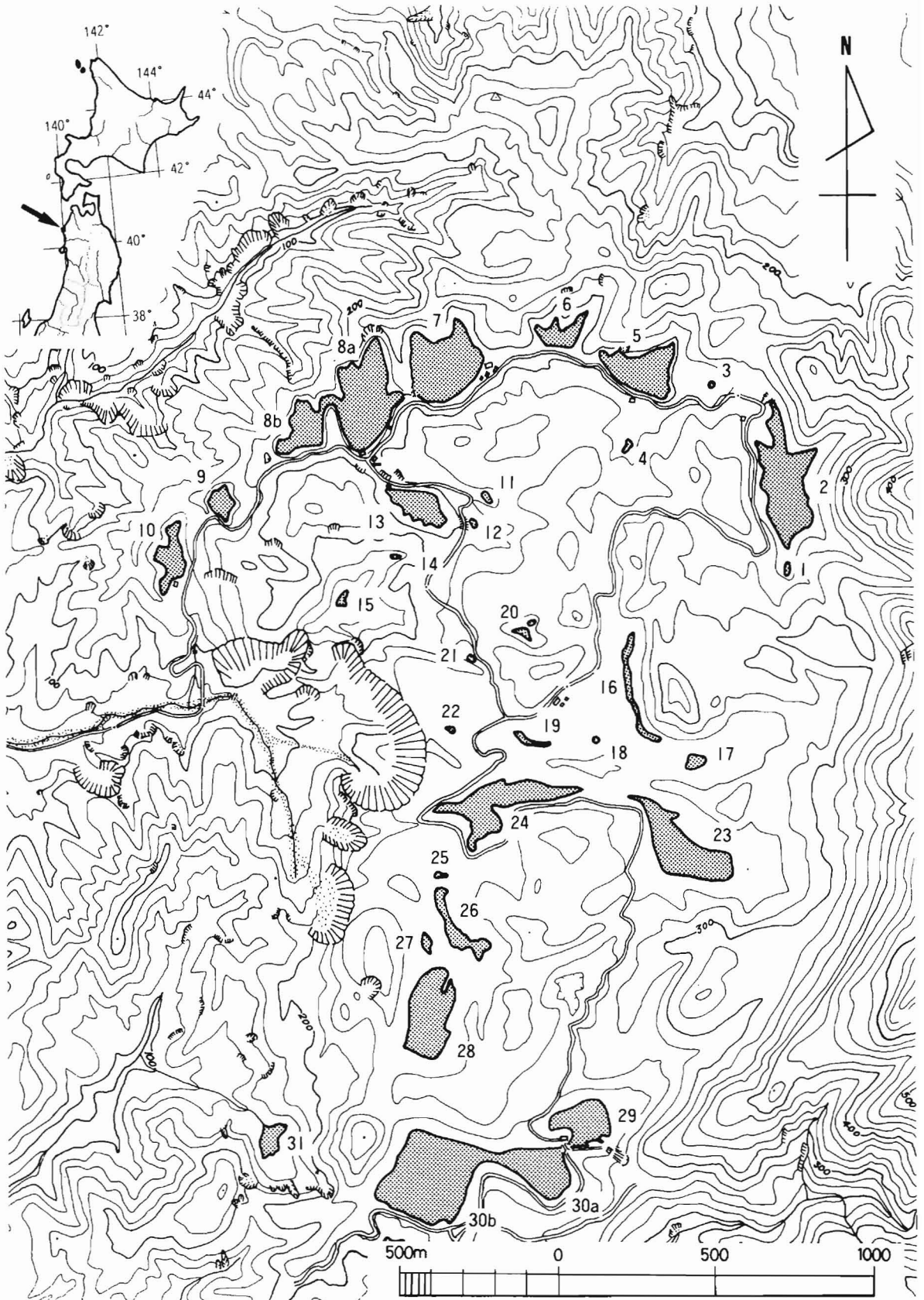
1) 誤植によると思われる違い：金属鉱業事業団（1976）の滝壺の池と玉池はそれぞれ沸壺の池と王池の、また深浦営林署（1987）の金の山池と湯池はそれぞれ金山の池と濁池の誤植であろう。また面子坂の池に相当する国土地理院（1987）の破池も、他の資料に矛盾がないことから単純な誤植であると思われる。

2) 漢字の読み由来したと思われる違い：西口（1988）、標識（1989）によるがま（の）池は、これ以前に使われていた藁（ひき）を読み変えたものと思われる。しかし、藁の字を単独でがまと読むことはないことから、藁（ひき）に戻したほうがよいと思われる。

3) 名前の取り違い：呼名の混乱のほとんどはこのタイプの違いであった。これらは山間の小さな湖沼に集中しており、道がなく位置の確定がむずかしいものが多い。標識(1989)の千鳥の池と牛旁の池は、これらの形状との整合性やとなり同士という位置関係から単純な標識の立て間違いと思われる。また、他の資料中の使用に混乱がないことから、標識(1989)の大池東湖は濁池に、西口(1988)と標識(1989)の仲道の池は八光の池に、西口(1988)の八光の池および標識(1989)の道芝の池は仲道の池に、金属鉱業事業団(1976)の四五郎の池は長池の一部に、さらに西口(1988)の埋釜の池と四五郎の池はそれぞれ四五郎の池と長池の一部に該当する。小夜沼と影坂の池は同じ谷の上下に位置するが、金属鉱業事業団(1976)、深浦営林署(1987)および標識(1989)では下方の池を小夜の池と呼んでおり、上方の池には名を与えていない。吉村・他(1934a, b)の記述や岩崎村役場企画課(1972)、岩崎村役場・岩崎村観光協会(1980)、水野(1987)の湖沼一覧表の数値を見る限りでは、明らかに上方が小夜沼で下方が影坂の池になる。吉村・他(1934a, b)は当時の深浦営林署の地図を引用していることから、その後50年間余りの間の営林署における地図の改訂の過程でそれまでの影坂の池が小夜の池に変えられたことがうかがえる。これらも前述した命名の過程から、吉村・他(1934a, b)を使用するのが妥当と思われる。石殻の池は最近の資料中には記載がないものが多いが、人文社(1970~1990)、岩崎村役場企画課(1972)、東奥日報社(1981)、水野(1987)ではメヨウガ池またはめようがの池、標識(1989)では子宝の池としている。また前述のように茗荷の池は西口(1988)では萱原の池に与えられており、その由来や出典は明らかでないことから、ここでは吉村・他(1934b)以来、盛谷(1968)まで矛盾なくして使用されてきた石殻の池の名を使うのがよいと思われる。しかし、その由来とされる大石の存在(吉村・他, 1934b)については確認していない。隣どうしに位置する埋釜の池および萱原の池については、その呼名混乱の経緯はやや複雑である。吉村・他(1934a, b)は、本文および図(図2)の萱原の池に対して、2つの表(第2表および第6表)では菅原の池と記載しており、ひとつの論文の中で2種の異なった字を使用している。吉村の同時期の他の論文(吉村・木場, 1933; 吉村, 1934)では萱の字を用いていることから、吉村・他(1934b)の2つの表に見られる菅は誤植と思われる。吉村・他(1934b)の第6表はその後何回か引用されているが、引用の過程で誤植をそのまま使用した可能性が高い。しかし、近年の資料の多く(金属鉱業事業団, 1976; 深浦営林署, 1987; 西口, 1988; 標識, 1989)は菅原の池の名を隣に位置する吉村・他(1934a, b)の埋釜の池に与えており、萱原の池に該当する湖沼は無名(金属鉱業事業団, 1976; 深浦営林署, 1987; 標識, 1989)か、他の名前(茗荷の池: 西口, 1988)にしている。これは、過去のどこかの時点で字の入れ替えに加えて場所の取り違いが行なわれたためと思われる。

4. 結論

以上の検討の結果、現時点では全面的に吉村・他(1934a, b)で用いられた湖沼名を使うのが最も妥当であると思われた。理由は以下の5点にまとめられる。1) 収集した限りでは、これが全湖沼を網羅したもっとも古い文献であり、詳しい地図があることから正確な場所の対応が可能である。2) 由来と湖盆形態の記述があり、いくつかについてはその整合性が確認できた。3) その後約30年の間に出版された資料との矛盾がない。4) 近年の資料中に見られる混乱の多くは単純なミスと思われるものがほとんどで、吉村・他(1934a, b)にとって代わるよ



りどころを備えたものは見つからない。また、吉村・他（1934a, b）と異なるいずれの呼名も現在すでに定着しているとは言い難い。5）聞き取りを行った限りにおいて、地元の方々の見解の中にこの結論と矛盾するものはなかった。

この検討結果をもとに、湖沼名を入れた地図を図1に示した。地図は金属鉱業事業団(1976)に修正を加えたものを用いた。湖沼名の表記および読み方は吉村・他（1934a, b）に準じたが、ノをのに変えた他、この論文中で2つ以上の異なった名前を使用している場合は、文章やその後の使用度合から判断して妥当と思われるものを採用した。

なお、現地調査を行った1990年秋からの一年間の間に限ると、四五郎の池は干上がったままで一度も湛水しなかった。また、石殻の池も水が見られたのは雪解けの時期と大雨の一時期だけであった。一方、他の湖沼は規模の変動やそれに伴う湖面の分断はあったものの干上がることはなかった。

今回行った聞き取り調査や資料の検討の過程で、本湖沼群には本論文で対象にした31湖沼の他にもいくつかの湖沼が存在することが明らかになった。十二湖在住の加藤正次氏によると、破池の西方と日暮橋より下流の濁川左岸方向にそれぞれひとつずつ干上がることのない池があるという。前者の池に名前があるかどうかは不詳だが、後者はくご池（くごはこの池のまわりに生えている草の名前）と呼んでいたとのことである。さらに、金属鉱業事業団（1976）や深浦営林署（1987）の地図には、これに加えて数個の水面の記入が見られる。これらはこれまでに名前がつけられた経緯がないようであるが、未調査のために正確な位置や規模などについてはわからない。今回対象としなかったこれらの湖沼については今後の課題としたい。

5. 謝 辞

文献や各種資料を収集するにあたって、弘前大学教育学部教授水野裕氏、同助教授斎藤利夫氏、青森県立郷土館佐藤功氏、青森営林局深浦営林署山本主、村上篤、川村悦雄の各氏、岩崎村役場七戸暁、西口正司の各氏、岩崎村ふれあいと創造の館七戸鉄雄氏、人文社第一編集部菊地昭夫氏、弘前大学理学部堀内弦氏にご協力いただきました。また、岩崎村十二湖旅館王池の加藤正次氏には草稿に対するご自身の見解を聞かせていただくとともに、地元の方々の意見を集約していただきました。さらに、図表の作製にあたっては筆者らが所属する弘前大学教育学

図1. 津軽十二湖湖沼群：各湖沼の位置と湖沼名。

Figure 1. Distribution of lakes in the Tsugaru-Jūniko lake group.

1. 青池 Ao-ike 2. 鶏頭場の池 Ketoba-no-ike 3. 曇沼 Hiki-numa
4. 沸壺の池 Wakitsubo-no-ike 5. 落口の池 Ochikuchi-no-ike 6. 中の池 Naka-no-ike
7. 越口の池 Koikuchi-no-ike 8a. 王池東湖盆 East basin of Ō-ike
- 8b. 王池西湖盆 West basin of Ō-ike 9. ニツ目の池 Futatsume-no-ike
10. 八景の池 Hakkei-no-ike 11. 仲道の池 Nakamichi-no-ike 12. 八光の池 Hakkō-no-ike
13. 日暮の池 Higurashi-no-ike 14. 小夜沼 Sayo-numa 15. 影坂の池 Kagesaka-no-ike
16. 長池 Naga-ike 17. 四五郎の池 Shigorō-no-ike 18. 子宝の池 Kodakara-no-ike
19. 埋釜の池 Ikarigama-no-ike 20. 道芝の池 Michishiba-no-ike 21. 石殻の池 Ishigara-no-ike
22. 萱原の池 Kayahara-no-ike 23. 金山の池 Kanayama-no-ike 24. 糸畑の池 Itobatake-no-ike
25. 三蔵の池 Sanzō-no-ike 26. 牛蒡池 Gobō-ike 27. 千鳥池 Chidori-ike
28. 面子坂の池 Menkozaka-no-ike 29. 濁池 Nigori-ike 30a. 大池東湖盆 East basin of Dai-ike
- 30b. 大池西湖盆 West basin of Dai-ike 31. 破池 Yabure-ik

部理科教育研究室の成田恵悦，外崎毅両氏に協力をいただきました。記して感謝いたします。

引用文献

- 深浦営林署 (1987) : 深浦事業区第5次樹立事業図.
 弘前高校生物部 (1962) : Blakiston (弘前高校生物部誌) No. 10, 21pp.
 岩崎村役場企画課 (1972) : 岩崎村勢要覧, p. 40-41.
 岩崎村役場・岩崎村観光協会 (1980) : 十二湖 (観光パンフレット).
 人文社(1970~1990) : 岩崎村, 郷土資料辞典, 県別シリーズ2, 青森・観光と旅. 人文社, 東京.(1990年版は第9版; 版番号不明の1970年版以降第9版までは同一の地図を用いている)
 Kawamura, T. (1956) : Limnological investigations of the Tsugarujūniiko lake group, Aomori prefecture, northern Japan, with special reference to the plankton communities. Mem. Fac. Fish. Hokkaido Univ. 4 : 1-89.
 金属鉱業事業団 (1976) : 1 : 10,000地図, 西津軽地域 D-1-2.
 国土地理院 (1987) : 1 : 25,000地形図 十二湖 (NK-54-30-1-2・4; 深浦1号-2・4).
 水野真・齋藤捷一 (1990) : 津軽十二湖湖沼群王池のプランクトン珪藻. Diatom 5 : 69-89.
 水野裕 (1987) : 切り立つ白い断崖と三十三の湖沼, 十二湖・日本キャニオン. p. 62-65. 日本の湖沼と溪谷3, 東北I : 十和田・田沢湖と久慈溪谷. ぎょうせい, 東京.
 西口正司 (1988) : 白神岳, 周辺ガイドと風土. 岩崎村むらおこし事業推進委員会, 189pp.
 盛谷智之 (1968) : 深浦地域の地質. 地域地質研究報告5万分の1図幅, 青森(5)第26号. 工業技術院地質調査所, 57pp.
 小川琢治 (1934) : 中央および東北日本の水河堆積物分布について. 地球 21 : 1-5.
 大町桂月 (1929) : 桂月全集別巻, p. 63-66. 興文社, 東京.
 齋藤捷一・古川一夫・横山朝子・市村治・加我盛生・伊藤鉄正・桜田睦子・毎原徹・前田善仁・清水透・福土正一・矢原優・日野修次 (1988) : 津軽十二湖湖沼群の陸生生物学的研究 (I) — 津軽十二湖湖沼群の概要と数湖沼に関する湖沼環境の変遷 —. 弘前大学教育学部紀要 59 : 33-45.
 酒井軍治郎・宮城一男 (1963) : 十二湖周辺の利水調査報告書. 青森県企画部, 41pp.
 東奥日報社 (1981) : 十二湖, p. 429. 青森県百科辞典, 東奥日報社, 青森.
 吉村信吉 (1934) : 津軽十二湖湖沼群諸湖の湖盆形態. 科学 4 : 455-457.
 吉村信吉・木場一男 (1933) : 青森県岩崎村松神十二湖の湖沼学的予察研究. 地理学評論 9 : 1046-1068.
 吉村信吉・木場一男・尾原信彦・長津一郎 (1934a) : 津軽十二湖の湖盆形態 (上) 津軽十二湖研究(1). 地理学評論 10 : 968-989.
 吉村信吉・木場一男・尾原信彦・長津一郎 (1934b) : 津軽十二湖の湖盆形態 (下) 津軽十二湖研究(1). 地理学評論 10 : 1091-1115.

(1991. 12. 20 受理)